大分県文化財調査報告書　第127輯

－県道中津高田線交通安全第１種事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

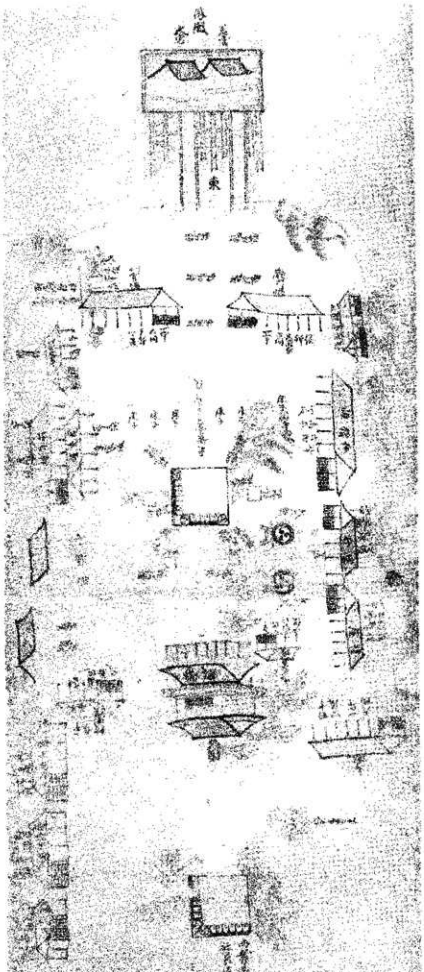
# 浮　殿　遺　跡

２００１

大分県教育委員会

－県道中津高田線交通安全第１種事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

# 浮　殿　遺　跡



宇佐放生會之次第　（臨川書房「神社古圖集」より転載）

# 序　　文

本書は大分県教育委員会が大分県土木建築部の依頼を受けて、平成９年８月から平成11年６月までに実施した主要地方道中津高田線（松崎工区）交通安全第一種事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録です。

浮殿遺跡の所在する宇佐市は、広大な平野をもち周防灘に面した自然豊かな地域であり、全国八幡社の総本社である宇佐神宮をはじめ、原始古代から中世・近世にかけて数多くの文化財を有する歴史の町でもあります。

今回報告する浮殿遺跡は、放生会の発祥の地と言われている和間神社の旧境内の一部にあたり、発見された遺構・遺物から当神社の歴史・古環境を知るうえで貴重かつ重要な資料となりました。今後、本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発及び学術研究の一助となれば幸いです。

最後に、この発掘調査に多大なご協力をいただきました関係各位に対して、衷心より感謝申し上げます。

平成13年３月30日

大分県教育委員会教育長
田　中　恒　治

# 例　　言

本書は平成10年度・11年度に実施した県道中津高田線交通安全第１種事業に伴う大分県宇佐市大字松崎字浮殿所在の浮殿遺跡に係る埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

1．埋蔵文化財発掘調査は大分県土木建築部の依頼を受けて大分県教育委員会が実施した。
2．遺構の実測・写真撮影及び遺物実測・トレースは調査担当者・調査員が実施した。
3．原稿の執筆、編集は栗原が行った。
4．遺物は大分県教育庁文化課文化財資料室に保管している。
5．付論の執筆は大分短期大学助教授佐々木章が行った。

# 本文目次

Ⅰ．調査の概要……1
　1．調査に至る経過……1
　2．調査の組織……1
　3．調査の経過……1
Ⅱ．遺跡の立地と環境……1
　1．地理的環境……1
　2．歴史的環境……2
Ⅲ．調査の成果……7
　1．調査の概要……7
　2．基本層序……7
　3．A区の調査……7
　4．B区の調査……9
　5．C区の調査……14
Ⅳ．まとめ……16
付論　宇佐市浮殿遺跡プラント・オパール分析……19

## 挿図目次

第1図　浮殿遺跡周辺遺跡分布図……2
第2図　浮殿遺跡周辺地形図1……3
第3図　浮殿遺跡周辺地形図2……4
第4図　浮殿遺跡土層断面図……4
第5図　浮殿遺跡遺構配置図……5～6
第6図　A区1号土坑実測図……7
第7図　A区出土遺物実測図……8
第8図　A区出土遺物実測図……9
第9図　A区2号・3号土坑実測図……8
第10図　A区出土遺物実測図……9
第11図　B区4号土坑実測図……10
第12図　B区5号土坑実測図……10
第13図　B区6号土坑実測図……10
第14図　B区7号土坑実測図……11
第15図　B区8号土坑実測図……11
第16図　B区9号土坑実測図……11
第17図　C区10号土坑実測図……14
第18図　B区出土遺物実測図……12
第19図　B区出土遺物実測図……13
第20図　B区出土遺物実測図……13
第21図　C区11号土坑実測図……14
第22図　C区12号土坑実測図……14
第23図　C区13号土坑実測図……14
第24図　C区14号土坑実測図……15
第25図　C区15号土坑実測図……15
第26図　C区16号土坑実測図……15
第27図　C区出土遺物実測図……16

## 表目次

土器観察表1……17
土器観察表2……18

## 図版目次

図版1　A区　全景　A区　近景
　　A区1号土坑　A区2号土坑
　　B区近景　B区4号土坑
図版2　B区5号土坑　B区7号土坑
　　C区14号土坑　C区15・16号土坑
　　B区作業風景　C区作業風景

# Ⅰ．調査の概要

## 1．調査に至る経過

大分県土木建築部では、主要地方道中津高田線(松崎工区)交通安全第１種事業の実施にあたり、平成９年10月23日に路線内に所在する文化財の取り扱いについてはじめての協議がもたれた。それを受けて平成９年10月27日・28日の二日間遺跡確認の立会調査を行った。その結果、中世の土師器の包含層を確認したため、次年度以降の工事予定地については本調査実施を決定した。

## 2．調査の組織

平成10年度

調査主体　大分県教育委員会

教 育 長　田中恒治

文化課長　後藤一郎

調査主任　清水宗昭（大分県教育庁文化課課長補佐兼埋蔵文化財第二係長）

調 査 員　栗原　眞（大分県教育庁文化課主査）

小柳和宏（大分県教育庁文化課主査）

平成11年度

調査主体　大分県教育委員会

教 育 長　田中恒治

文化課長　山本芳直

調査主任　清水宗昭（大分県教育庁文化課課長補佐兼埋蔵文化財第二係長）

調 査 員　栗原　眞（大分県教育庁文化課主査）

## 3．調査の経過

発掘調査は既述の調査組織で行った。以下調査が２ケ年にわたり行われたので、便宜上調査区をＡ区・Ｂ区・Ｃ区と設定し発掘調査に臨んだ。

平成10年度

Ａ区の調査を平成10年８月16日から８月25日、Ｂ区を平成10年９月24日から10月２日まで実施した。調査の結果、遺構は土坑９基、ピット多数、遺物は中世土師器片・近世陶磁器を多数検出した。

平成11年度

Ｃ区を平成11年６月９日から６月25日に実施した。調査の結果、遺構は土坑７基、ピット12基、遺物は中世土師器片・近世陶磁器を中心に検出し、すべての調査を平成11年６月25日に終了した。

# Ⅱ．遺跡の立地と環境

## 1．地理的環境

宇佐市は大分県北部に位置しており、西は中津市・三光村、東は豊後高田市、南は宇佐郡・速見郡に接している。宇佐市は周防灘に開けた宇佐平野が広がり、中央を南北に駅館川が北流し東岸は洪積台地(宇佐原)を形成している。また市の東端を寄藻川が、西部を伊呂波川がそれぞれ北流して周防灘に注ぐ。このように水流に恵まれているため、これらの流域一帯は原始古代から多くの遺跡の集中地帯として広く知られている。今回の調査対象となった浮殿遺跡は寄藻川と向野川が合流して和間浜で周防灘に注ぎその河口に面した宇佐平野の東端、豊後高田市との市境に所在する。浮殿遺跡のある和間神社周辺は近世以降の干拓事業で埋め立てられたため、現在は海岸線から約300m程内陸部に位置するが、本来は周防灘に直接面していた砂州上にあったと思われる。

## 2．歴史的環境

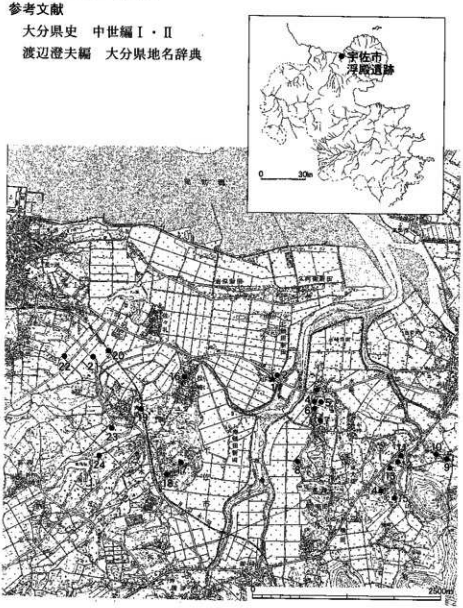
宇佐平野に分布する遺跡を概観すると、駅館川東岸の宇佐原と呼ばれる洪積台地上には大規模集落の一つである東上田遺跡をはじめ、御幡遺跡・野口遺跡・樋尻道遺跡・川部遺跡等の弥生時代の遺跡が連なっている。古墳時代になると赤塚古墳を中心に川部・高森古墳群が形成され、この台地上が宇佐平野の一大拠点をなしていたと思われる。また駅館川の東方、御許山北麓に連なる宇佐丘陵の北端に宇佐八幡宮が鎮座する。宇佐八幡宮は古代・中世において伊勢神宮を凌ぐ経済力を有し、九州一の荘園領主として威勢を誇った。

宇佐八幡宮は神仏習合の発生の地とも言われている。神仏習合思想は本来別々の宗教思想である神道思想と仏教思想が融合し、その一本化を図った思想で奈良時代の神宮寺にその起源を見ることができる。宇佐神宮の場合は弥勒寺、中津尾寺の二寺が建立されたと言われている。また元来仏教思想からきている放生会も養老年間隼人征伐による隼人の霊を鎮めるため、宇佐八幡宮で始まったとされているが、今回の調査区に近隣している和間神社(浮殿)がこの放生会の祭祀の場としての役割を果たしたのである。

**参考文献**

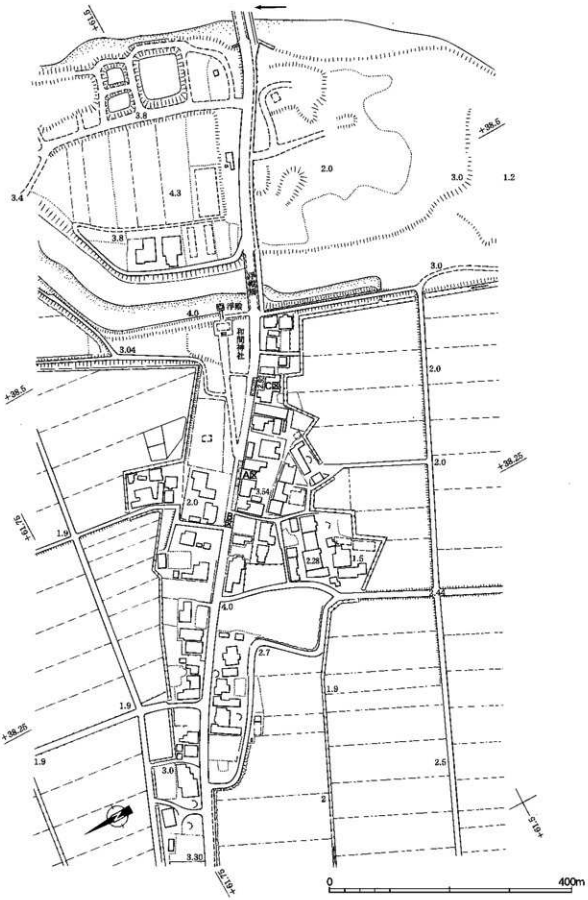

大分県史　中世編Ⅰ・Ⅱ

渡辺澄夫編　大分県地名辞典

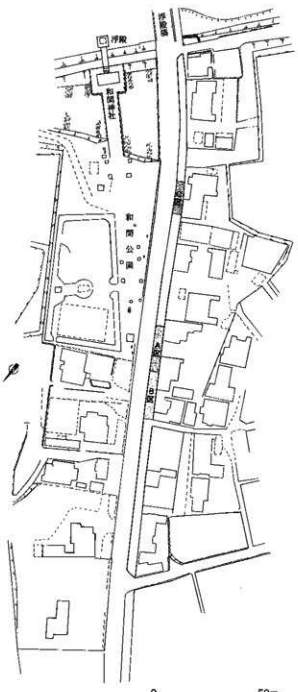




1．浮殿遺跡
2．蟾塚神社
3．水崎貝塚
4．千人塚古墳
5．大塚遺跡
6．水崎第２貝塚
7．灰屋ノ尾遺跡
8．石原貝塚
9．鬼塚古墳
10．野地遺跡
11．田笛社古墳
12．鉾塚１号墳
13．〃　２号〃
14．犬田遺跡
15．貴船社遺跡
16．虎尾古墳群
17．原古墳
18．乙松古墳群
19．蟾木遺跡
20．小塚本古墳
21．原塚古墳群
22．妙善田古墳
23．野森窯跡
24．原山古墳

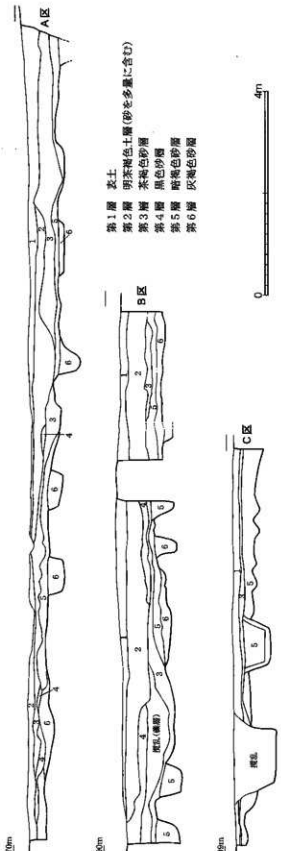
第１図　浮殿遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院二万五千分の一地形図「豊後高田」より転載）（S＝1:40,000）



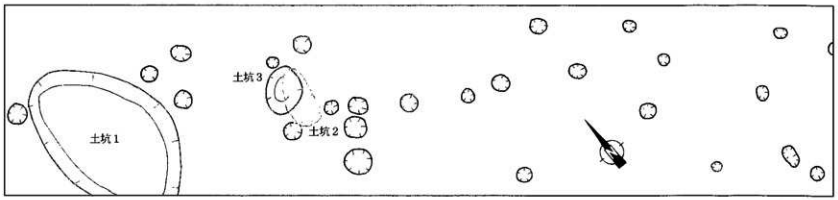

第２図　浮殿遺跡周辺地形図１



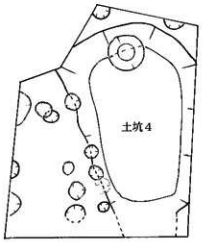

第３図　浮殿遺跡周辺地形図２（S＝1：100,000）

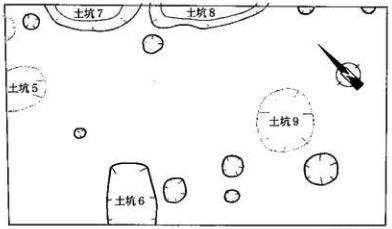



第４図　浮殿遺跡土層断面図

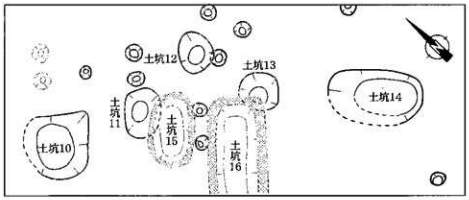



調査区　A区




調査区　B区




調査区　C区

第5図　浮殿遺跡遺構配置図(1:100)

# Ⅲ．調査の成果

## １．調査の概要

調査は平成10年８月16日から平成11年６月25日まで、１次から３次に分けて行われた。調査方法はいずれも重機で表土を除去した後、調査補助員の手仕事で遺構・遺物の精査を実施するというものであった。調査区は地形から砂州だったと推定され、表土直下は土質をほとんど含まない砂層である。このため遺物が遺構に伴うかどうか明確に判断できるもの以外は、層ごとに一括で取り上げることを基本にした。また遺物の量はA区、B区に比べてC区は少ない。遺物の大半は土師器の小片で、実測可能なものは若干である。

## ２．基本層序

調査区は歩道設置工事予定のほぼ中間に位置する。調査区の幅は約４m、全長約16mである。調査区の表土を20cmほど除去すると遺構検出面となる。検出面の標高は３m前後である。区内の土砂堆積状況(第４図参照)は表土(第１層)、明茶褐色土層(第２層)、茶褐色砂層(第３層)、黒色砂層(第４層)、暗褐色砂層(第５層)、灰褐色砂層(第６層)の順である。遺構は第２層から第５層にかけて確認されるが、第２層では主に近世以降の遺物、第３層では主に中世中頃から後半(14世紀から16世紀)の遺物、第５層を中心に12～13世紀の遺物を確認した。

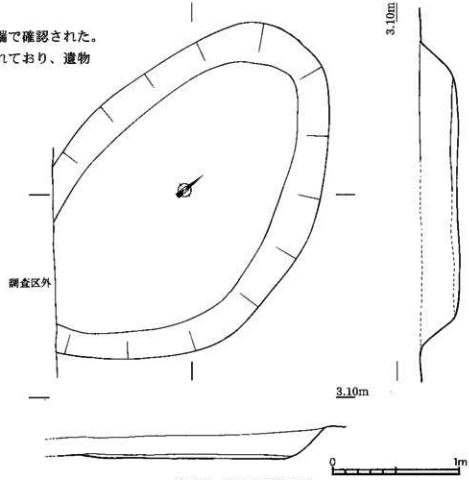
## ３．Ａ区の調査

### 遺構

遺構として土坑とピット群を確認したが、ピットから掘立柱建物等を検出することができなかった。

１号土坑（第６図）

遺構は調査区の西端で確認された。第３層から掘り込まれており、遺物も土師器が主であるが実測可能なもの４点にとどまる。遺構の規模は一部用地外になるものの、長軸3.1m、短軸２m、深さ約25～30cmである。遺構内には頭大の川原石が含まれていたが、用途等は不明である。



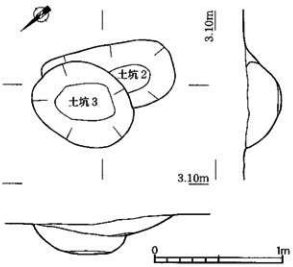

第６図　Ａ区１号土坑実測図

２号土坑（第９図）

遺構は調査区の中央部に位置し、平面形は南北長軸１m、東西短軸50cmの楕円形を呈しており、深さは８cmである。遺物は近世染め付けの破片数点と貨幣（寛永通宝101）が１枚出土している。以上のことから土坑の時期は近世以降のものと比定できる。

３号土坑（第９図）

遺構は２号土坑と切り合い関係にある。平面形は長軸80cm、短軸65cmのほぼ円形である。遺物は土師器片を少量検出したが、実測可能なものはない。貨幣（永楽通宝102）１枚が出土している。土層観察から遺構の時期は14世紀前後と考えられる。

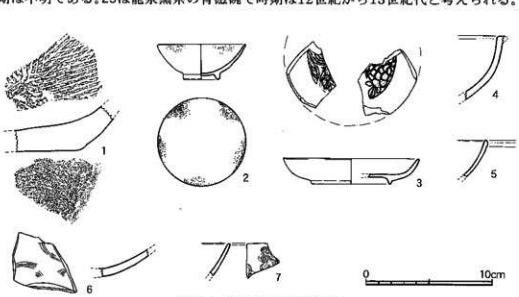


第９図　A区２号・３号土坑実測図

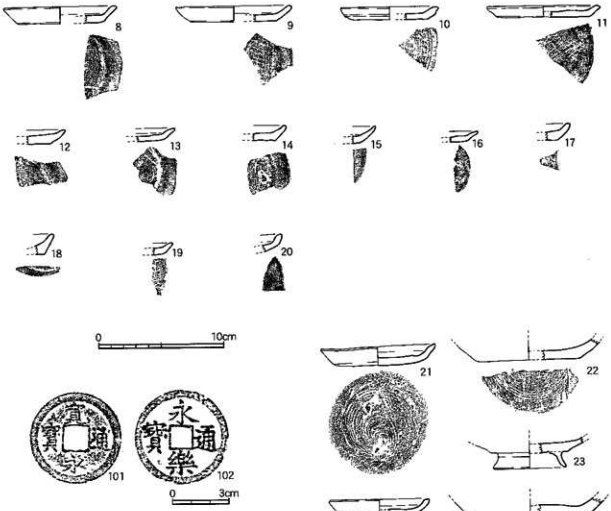
遺物（第７図１～７　第８図８～20　第10図21～25）

遺物は基本的に土層毎に取り上げることとした。土師器の小片が大半であるが、実測可能なものは若干であった。種類は近現代の染め付けの湯飲み碗・杯、近世の茶碗の小片・すり鉢片、土師器の小皿・埦・坏、青磁片である。

１～７、12～20は第２層からの取り上げであるが、土師器は小皿の小片で大きさは不明であるが、口縁が短く外に開いている。時期が14世紀から15世紀前後のものと考えられ、他の遺物との整合性からこの層は攪乱を受けている可能性が高い。８～11は１号土坑出土の土師器の小皿で口径が９cm前後である。口縁が短く外に開く。胎土に赤色砂粒、角閃石、長石の微粒を含む。時期は13世紀代と考えられる。21～25は第５層の出土である。21、22、24は土師質の小皿で口径は８cmから９cm、口縁は短く外に開く。時期は１号土坑出土の小皿とほぼ同時代か、やや古くなると思われる。23は土師器の埦で時期は不明である。25は龍泉窯系の青磁碗で時期は12世紀から13世紀代と考えられる。



第７図　A区１号出土遺物実測図




第８図　Ａ区出土遺物実測図（１号・２号・３号土坑、第２層）

第10図　Ａ区出土遺物実測図（第３層）

## ４．Ｂ区の調査

### 遺構

Ａ区同様土坑とピット群を確認したが、掘立柱建物等の検出はできなかった。

４号土坑（第11図）

遺構は調査区の北西端に位置し、北側一部と南西側は調査区外である。平面形は一部攪乱で切られている箇所もあるが南北に長い隅丸方形を呈しており、東西の長さは約1.5mで南北の長さは不明である。深さは50cmである。多量の土師器片を検出した。

遺物は土師器片を多数検出したが、実測可能のものは若干である。また検出面で蟾の殻を少量確認した。この蟾が放生会の祭祀に使用されたものかは不明である。

土坑の時期は土層観察から12～13世紀に比定できる。

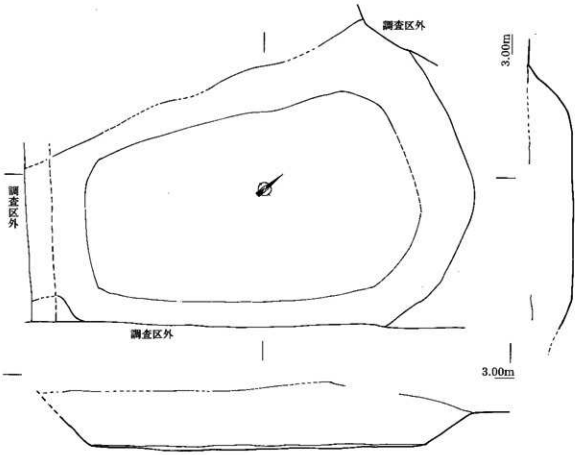
５号土坑（第12図）

遺構は調査区の中央やや西側に位置し、３分の１が家屋の出入り用の通路にかかるため、全体の

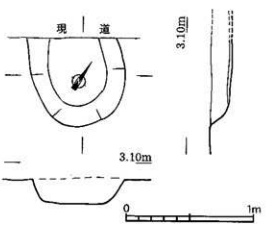
規模は不明である。平面形は楕円形と推定される。規模は南北短軸45cmであるが東西の長さは不明である。深さは20cmである。遺物はない。

6号土坑（第13図）

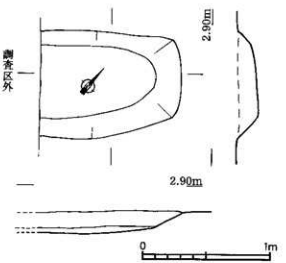
遺構は調査区の中央やや南に位置し、遺構の半分は調査区外である。平面形は不明であるが、短軸85cm、深さ10cmである。遺物は土師器片を検出したが、実測可能なものは3点にとどまる。




第11図　B区4号土坑実測図




第12図　B区5号土坑実測図




第13図　B区6号土坑実測図

7号土坑（第14図）

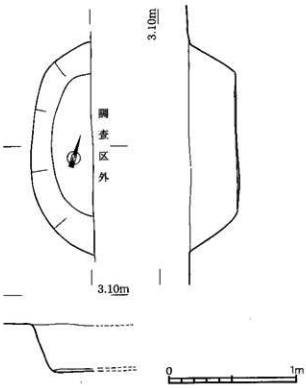
遺構は調査区の中央の北東に位置し、遺構の半分は調査区外である。故に平面形は不明であるが検出状況から楕円形と考えられる。規模は長軸1.7m、深さ40cmである。

遺物は多数の土師器片を検出したが、実測可能なものは3点である。

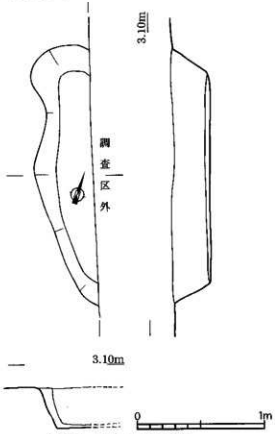
8号土坑（第15図）

遺構は6号土坑の東側に近接している。遺構の半分は調査区外で平面形及び規模は不明である。深さは30cmである。

遺物は6号土坑とほぼ同時期の土師器片を検出したが、実測可能なものは1点である。



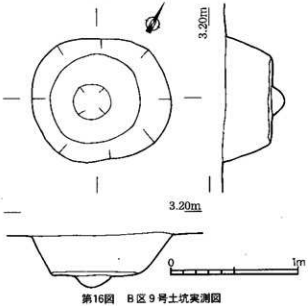

第14図　B区7号土坑実測図




第15図　B区8号土坑実測図

9号土坑（第16図）

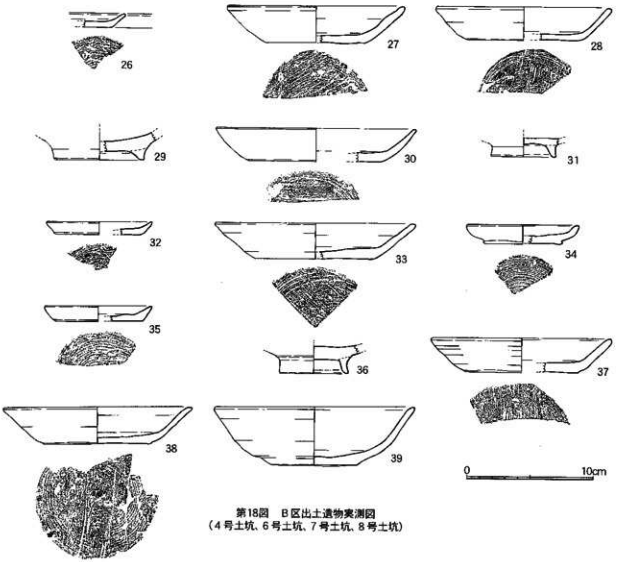
遺構は調査区の南東に位置し、平面形は円形で長軸1.2m、短軸1mである。深さは35cmである。底部の中央には長径28cm、深さ10cmの円形の掘り込みがある。遺物は確認できなかったが、土層観察から近世以降のものと考えられる。



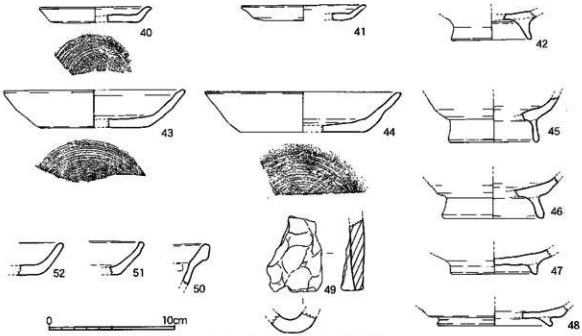

第16図　B区9号土坑実測図

遺物（第18図26～39　第19図40～52　第20図53～62）

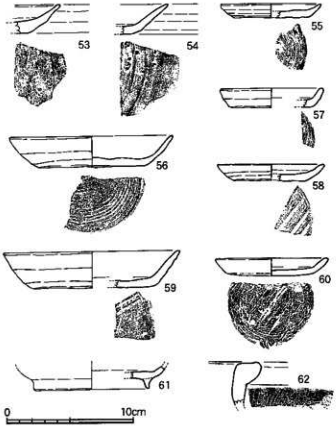
３調査区の中で出土遺物の量は最も多い。A区同様、層ごとの取り上げを基本とした。第２層は近現代の盃片、染め付けの茶碗等が主で若干土師器片を検出したが、いずれも実測可能なものはない。26～32は４号土坑、33～35は６号土坑、36は7号土坑、37～39は８号土坑からの出土である。いずれも土師器の小皿、坏、埦である。小皿の口径は8.2㎝～９㎝、口縁は外に開き気味である。坏の口径は14㎝～16㎝あり、体部にわずかに丸みを帯びるものもある。時期は、26～35は12世紀から13世紀代と考えられる。36は土師器の埦で時期は不明。37～39は４号土坑、６号土坑の坏と時期差はあまりないと思われることから13世紀代と考えたい。40～52(49、50は除く)は第３層取り上げの土師器の小皿・坏・埦である。小皿の口径は９㎝～10㎝で口縁は外に開く。坏の口径は14.4㎝、15.6㎝で胎土・色調は小皿・埦と大差ない。いずれの時期も13世紀後半から14世紀代と考えられる。埦は体部から口縁部がいずれも欠けている。底径は７㎝～9.2㎝である。49、50は器種は不明だが、土師質である。53～61は第５層取り上げの土師器の小皿・坏・埦である。いずれも第３層から出土のものと口径、色調、胎土等に大差はないが、土層観察と併せて時期を12世紀から13世紀としたい。62は瓦質土器の口縁部で、黒色である。器種は不明だが、宇佐地方の瓦器埦の出現は藤田遺跡の調査成果から12世紀以降と考えられるので12世紀代に比定したい。




第18図　B区出土遺物実測図
（４号土坑、６号土坑、７号土坑、８号土坑）




第19図　B区出土遺物実測図(第3層)




第20図　B区出土遺物実測図(第5層)

## 5．C区の調査

### 遺構

遺構として土坑、ピットを確認したが、掘立柱建物等の遺構は確認できなかった。

10号土坑（第17図）

遺構は調査区西端にあり、規模は長軸１m、短軸90cm、深さ約40cmである。遺構の一部が調査区外であるが、平面形は不定形である。底部に直径20cm、深さ20cmのピット状の掘り込みが検出された。遺物は確認されなかったが、遺構検出面の土層観察から14世紀～15世紀のものと考えられる。

11号土坑（第21図）

遺構は東側一部を16号土坑に切られている。規模は長軸90cm、深さ30cmである。平面は楕円形である。遺物は出土していない。

遺構の時期は検出面の土層観察から12世紀～13世紀のものと考えたい。

12号土坑（第22図）

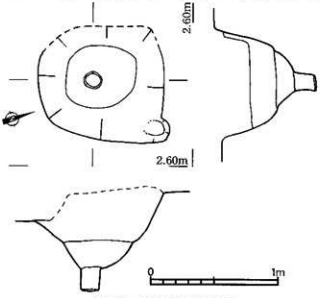
遺構は調査区の中央に位置し、平面形は長軸75cm、短軸60cmの円形である。深さは40cmである。遺物は土師器片を少量検出したが時期は不明である。

遺構の時期は12世紀～13世紀のものと考えたい。

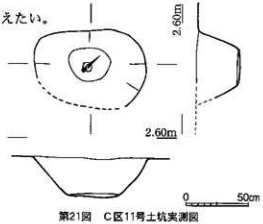
13号土坑（第23図）

遺構は南西部を15号土坑に切られている。規模は70cm四方の隅丸方形で、深さは50cmである。少量の遺物を検出したが実測可能なものはない。

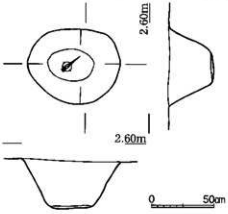
遺構の時期は検出面から12世紀～13世紀のものと考えたい。



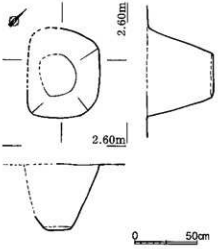
第17図　C区10号土坑実測図



第21図　C区11号土坑実測図



第22図　C区12号土坑実測図

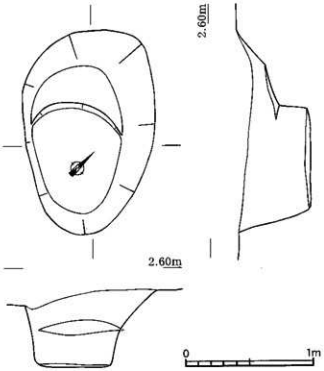


第23図　C区13号土坑実測図

### 14号土坑（第24図）

遺構は調査区の東側にある。遺構の南側は現代のゴミ捨て場に利用されており、大きく攪乱されていた。遺構は二段掘りの形態をとるが、切り合い関係にあるかどうかは不明である。規模は上部の長軸1.8m、短軸1m、内部で長軸90cm、短軸55cm、深さは50cmである。平面形は楕円形である。遺物は少量の土師器片を検出したが、時期を特定するには至らなかった。

遺構の時期は土層観察から12世紀から13世紀と比定できる。



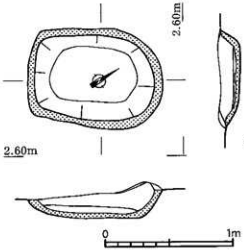

第24図　C区14号土坑実測図

### 15号土坑（第25図）

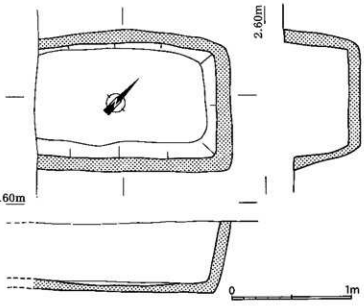
遺構は16号土坑の西側に位置し、上部が激しく削平されていた。16号土坑と同様に厚さ5cmの粘質土で固めていたが、底部から壁の立ち上がり部分のみで、規模や平面形は不明である。

### 16号土坑（第26図）

遺構は調査区の中央にあり、南側は調査区外である。東端で13号土坑から16号土坑との切り合い関係にある。平面形は長方形で壁、床が厚さ15cmから18cmほどの粘質土で固められていた。規模は検出面でみると長軸は1.2m、短軸1m、深さ60cmである。遺構は表土直下で確認されたもので、近世以降の便所施設と考えられるが、神社の施設か一般家屋に伴うものかは不明である。埋土は第5層と同様の砂質である。




第25図　C区15号土坑実測図

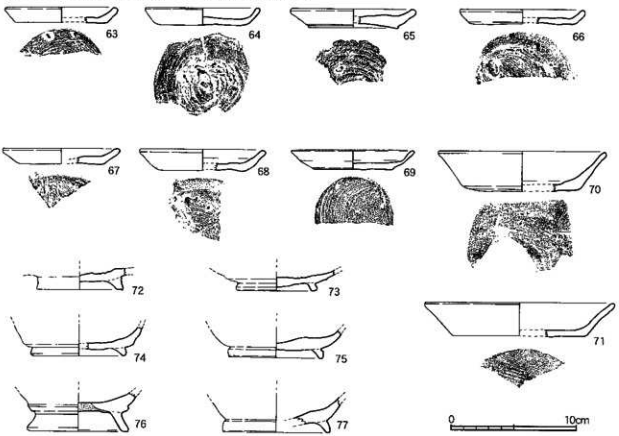



第26図　C区16号土坑実測図

**遺物（第27図63～77）**

この調査区では土層で第２層と第４層が確認されず、遺物は３調査区の中で最も少ない。第３層から土師器片を検出したが、小片で実測可能なものはない。

63～85は第５層取り上げの土師器である。63～69は小皿で口径が９㎝～10㎝とやや大きめで器高は1.1㎝から1.7㎝である。70、71は土師器の坏で口径は13.4㎝、15.2㎝で器高は3.1㎝、2.6㎝である。72～77は土師器の埦で体部から口縁部が欠けている。色調や胎土は小皿・坏・埦ともに大差ない。時期は12世紀から13世紀と考えたい。




第27図　Ｃ区出土遺物実測図（第５層）

## Ⅳ．まとめ

宇佐放生会の始まりは720年(養老４年)と言われているが、それを裏付ける資料は乏しく、また、放生会が執り行われる和間神社の境内の様子が伺える資料としては唯一応永27年に書かれたという「宇佐放生会之次第」が所在するのみである。

今回の発掘調査では、調査区の面積も約140㎡と狭く、古地図に見られるような建物跡は確認できなかったが、土師器を主体とする出土遺物は、調査区が旧境内地内にかかっていることを伺わせる。出土した土師器は、小皿・坏・埦で、形態や胎土の種類に大差はなく、底部はヘラ切りが若干あるが大部分は糸切り離しである。従って時期的に最も古いもので11世紀代にまで逆上ることはできるが、12世紀～13世紀、13世紀後半～15世紀代が中心である。

今回の調査では、調査区にあたる地区が旧境内地内であることが判明したことは大きな成果と言えるものの、放生会の始まったとされる８・９世紀代の遺物を確認することはできなかった。

**参考文献**

『国史大事典』(吉川好文館)、『神社古蹟集』(臨林書店)、『宇佐宮弥勒寺』宇佐宮弥勒寺旧境内発掘調査概報１　大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館

## 土器観察表 1

単位(cm)

| 番号 | 器種 | 地区・遺構 | 計測値(復元) | 調整 | 成形 | 胎土 | 焼成 | 色調 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 陶器 すり鉢 | A区第2層 | | 内 縦方向の櫛 | ロクロ成形 | 陶製胎土 | 良 | 暗茶褐色 |
| 2 | 磁器 染付 坏 完形 | A区第2層 | 口径7.0 底径2.8 器高2.8 | | | | 良 | |
| 3 | 磁器 染付 碗 | A区第2層 | 口径10.8 底径6.2 器高2.0 | | ロクロ成形 | 陶製胎土 | 良 | |
| 4 | 磁器 鉢 | A区第2層 | | 回転横ナデ ヘラ削り | ロクロ成形 | | 良 | |
| 5 | 白磁 | A区第2層 | | | | | | |
| 6 | 磁器 染付 | A区第2層 | | | | | 良 | |
| 7 | 磁器 | A区第2層 | | | | | 良 | |
| 8 | 土師器 小皿 | A区第1土坑 | 口径9.0 底径6.8 器高1.3 | 回転横ナデ 指ナデ(不定方向) | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒少ない・1mm大の長石・角閃石・赤色粒 | 良 | 内面 淡黄橙色 |
| 9 | 土師器 小皿 | A区第1土坑 | 口径9.2 底径6.8 器高1.2 | 回転横ナデ 指ナデ(不定方向) | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒少ない・0.5mm大の長石・角閃石 | 良 | 淡黄橙色 |
| 10 | 土師器 小皿 | A区第1土坑 | 口径7.8 底径6.0 器高1.0 | 回転横ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒少ない・0.5mm大の長石多い・角閃石少ない | 良 | 淡黄色 |
| 11 | 土師器 小皿 | A区第1土坑 | 口径9.0 底径7.2 器高0.9 | 回転横ナデ 指ナデ(不定方向) | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒少ない・1mm大の長石・角閃石少ない | 良 | 淡褐色 |
| 12 | 土師器 小皿 | A区第2層 | 器高1.0 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒少ない・1mm大の長石・角閃石少ない | 良 | 淡黄橙色 |
| 13 | 土師器 小皿 | A区第2層 | 器高0.8 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒少・長石少ない・角閃石多い | 良 | 淡橙色 |
| 14 | 土師器 小皿 | A区第2層 | 器高1.2 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒少・長石少ない・角閃石多い | 良 | 淡橙色 |
| 15 | 土師器 小皿 | A区第2層 | 器高1.2 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒・長石・角閃石少ない | 良 | 淡黄色 |
| 16 | 土師器 小皿 | A区第2層 | 器高0.9 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒・長石・角閃石少ない | 良 | 淡橙色 |
| 17 | 土師器 小皿 | A区第2層 | 器高1.3 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒・長石・角閃石少ない | 良 | 淡橙色 |
| 18 | 土師器 小皿 | A区第2層 | 器高1.6 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒・長石・角閃石少ない | 良 | 淡橙色 |
| 19 | 土師器 小皿 | A区第2層 | 器高0.9 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒・長石・角閃石少ない | 良 | 淡黄橙色 |
| 20 | 土師器 小皿 | A区第2層 | | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒・長石・角閃石少ない | 良 | 淡黄橙色 |
| 21 | 土師器 小皿 | A区第5層 | 口径9.0 底径6.0 器高1.5 | 回転横ナデ 指ナデ(不定方向) | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒少ない・1mm大の長石・角閃石・赤色粒 | 良 | 淡橙色 |
| 22 | 土師器 小皿 | A区第5層 | 底径8.0 | 回転横ナデ 指ナデ(不定方向) | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒少ない・1mm大の長石・角閃石 | 良 | 淡黄橙色 |
| 23 | 土師器 碗 | A区第5層 | 底径5.8 | 回転横ナデ | ロクロ成形 高台貼付け | 砂粒少ない・1mm大の長石・角閃石 | 良 | 淡褐色 |
| 24 | 土師器 小皿 | A区第5層 | 口径8.0 底径4.8 器高1.3 | 回転横ナデ 指ナデ(不定方向) | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒少ない・1mm大の長石・角閃石・赤色粒 | 良 | 淡黄橙色 |
| 25 | 青磁碗 | A区第3層 | 底径6 | | | | | |
| 26 | 土師器 小皿 | B区4号土坑 | | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒少ない・長石・角閃石 | 良 | 淡褐色 |
| 27 | 土師器 坏 | B区4号土坑 | 口径14.2 底径7.8 器高2.9 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒少ない・長石・角閃石多い | 良 | 淡褐色 |
| 28 | 土師器 坏 | B区4号土坑 | 口径16.0 底径10.8 器高2.6 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒少ない・長石・角閃石多い | 良 | 淡褐色 |
| 29 | 土師器 碗 | B区4号土坑 | 底径7.0 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 高台貼付け | 砂粒少ない・長石多い | 良 | 灰褐色 |
| 30 | 土師器 坏 | B区4号土坑 | 口径14.0 底径9.0 器高2.6 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒少ない・長石・角閃石多い | 良 | 淡褐色 |
| 31 | 土師器 碗 | B区4号土坑 | 底径5.0 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 高台貼付け | 砂粒少ない・長石多い | 良 | 淡黄褐色 |
| 32 | 土師器 小皿 | B区4号土坑 | 口径8.2 底径6.4 器高1.0 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒少ない・長石・角閃石 | 良 | 淡褐色 |
| 33 | 土師器 坏 | B区7号土坑 | 口径16.0 底径9.4 器高2.9 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒少ない・長石・角閃石多い | 良 | 淡褐色 |
| 34 | 土師器 小皿 | B区7号土坑 | 口径9.0 底径6.0 器高1.5 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒少ない・長石・角閃石 | 良 | 淡褐色 |
| 35 | 土師器 小皿 | B区7号土坑 | 口径6.5 底径7.0 器高1.3 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒少ない・長石・角閃石 | 良 | 淡褐色 |
| 36 | 土師器 碗 | B区7号土坑 | 底径5.4 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 高台貼付け | 砂粒少ない・長石多い 小石英少ない | 良 | 淡黄褐色 |
| 37 | 土師器 坏 | B区8号土坑 | 口径14.8 底径9.0 器高2.9 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒少ない・長石・角閃石多い | 良 | 淡褐色 |
| 38 | 土師器 坏 | B区8号土坑 | 口径14.4 底径8.4 器高2.9 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒少ない・長石・赤色粒多い | 良 | 淡褐色 |
| 39 | 土師器 坏 | B区8号土坑 | 口径16.0 底径6.6 器高4.6 | 回転横ナデ 指ナデ 板状圧痕 | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒少ない・長石・金雲母多い | 良 | 淡褐色 |

## 土器観察表 2

単位（cm）

| 番号 | 器種 | 地区・遺構 | 計測値（復元） | 調整 | 成形 | 胎土 | 焼成 | 色調 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 40 | 土師器 小皿 | B区 第3層 | 口径9.0 底径6.8 器高1.2 | 回転横ナデ 指ナデ（不定方向） | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒少ない・1㎜大の長石・角閃石 | 良 | 淡褐色 |
| 41 | 土師器 小皿 | B区 第3層 | 口径10.0 底径6.8 器高1.2 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒少ない・1㎜大の長石・角閃石 | 良 | 淡褐色 |
| 42 | 土師器 椀 | B区 第3層 | 底径6.4 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 高台貼付け | 砂粒少ない・1㎜大の長石・角閃石 | 良 | 淡茶褐色 |
| 43 | 土師器 坏 | B区 第3層 | 口径14.4 底径8.5 器高2.9 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒多い・角閃石・1㎜大の長石 | 良 | 淡黄橙色 |
| 44 | 土師器 坏 | B区 第3層 | 口径15.6 底径10.0 器高3.1 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒多い・長石・角閃石少ない・白英少ない | 良 | 内面 淡褐色 |
| 45 | 土師器 椀 | B区 第3層 | 底径7.2 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 高台貼付け | 砂粒少ない・1㎜大の長石・角閃石 | 良 | 淡褐色 |
| 46 | 土師器 椀 | B区 第3層 | 底径8.0 | 回転横ナデ | ロクロ成形 高台貼付け | 砂粒少ない・1㎜大の長石・角閃石 | 良 | 淡褐色 |
| 47 | 土師器 椀 | B区 第3層 | 底径7.0 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 高台貼付け | 砂粒少ない・1㎜大の長石・角閃石 | 良 | 淡褐色 |
| 48 | 土師器 椀 | B区 第3層 | 底径9.2 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 高台貼付け | 砂粒少ない・1㎜大の長石・角閃石 | 良 | 淡褐色 |
| 49 | 土師器 | B区 第3層 | | 指ナデ | 手ずくね | 砂粒少ない・1㎜大の長石・角閃石 | 良 | 淡褐色 |
| 50 | 土師器 | B区 第3層 | | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒少ない・1㎜大の長石・角閃石 | 良 | 淡褐色 |
| 51 | 土師器 坏 | B区 第3層 | 器高2.5 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒・長石・角閃石・赤色粒多い | 良 | 淡褐色 |
| 52 | 土師器 坏 | B区 第3層 | 器高2.5 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒・1㎜大の長石多い | 良 | 淡褐色 |
| 53 | 土師器 坏 | B区4～5層 | 器高2.1 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒多い・長石・角閃石少ない | 良 | 淡褐色 |
| 54 | 土師器 坏 | B区4～5層 | 器高2.3 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒多い・長石・角閃石少ない | 良 | 淡褐色 |
| 55 | 土師器 小皿 | B区4～5層 | 口径8.4 底径6.0 器高1.3 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒多い・長石・角閃石多い | 良 | 灰黄色 |
| 56 | 土師器 坏 | B区4～5層 | 口径13.0 底径8.5 器高2.4 | 回転横ナデ 指ナデ（不定方向） | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒・1㎜大の長石・角閃石ともに多い | 良 | 淡褐色 |
| 57 | 土師器 小皿 | B区4～5層 | 口径8.4 底径6.4 器高1.5 | 回転横ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒少ない（長石・角閃石） | 良 | 淡褐色 |
| 58 | 土師器 小皿 | B区4～5層 | 口径8.5 底径5.5 器高1.1 | 回転横ナデ 指ナデ（不定方向） | ロクロ成形 回転糸切り | 長石・角閃石 | 良 | 灰黄色 |
| 59 | 土師器 坏 | B区4～5層 | 口径14.0 底径9.2 器高2.9 | 回転横ナデ 指ナデ（不定方向） | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒多い・長石・角閃石ともに少ない | 良 | 淡黄橙色 |
| 60 | 土師器 小皿 | B区4～5層 | 口径9.0 底径6.5 器高1.4 | 回転横ナデ 指ナデ（不定方向） | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒少ない・1㎜大の長石・角閃石 | 良 | 淡褐色 |
| 61 | 土師器 椀 | B区4～5層 | 底径9.2 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 高台貼付け | 砂粒少ない・1㎜大の長石・角閃石多い | 良 | 淡褐色 |
| 62 | 瓦質 | B区4～5層 | | 横ナデ | ロクロ成形 高台貼付け | 砂粒少ない・1㎜大の長石・角閃石 | 良 | 黒色 |
| 63 | 土師器 小皿 | C区5層 | 口径9.0 底径7.2 器高1.2 | 回転横ナデ 指ナデ（不定方向） | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒少ない・1㎜大の長石・角閃石多い | 良 | 淡褐色 |
| 64 | 土師器 小皿 | C区5層 | 口径9.0 底径6.5 器高1.4 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒少ない・1㎜大の長石・角閃石・赤色粒 | 良 | |
| 65 | 土師器 小皿 | C区5層 | 口径10.0 底径7.0 器高1.5 | 回転横ナデ 指ナデ（不定方向） | ロクロ成形 回転ヘラ切り | 砂粒多い・1㎜大の長石・角閃石多い | 良 | 淡褐色 |
| 66 | 土師器 小皿 | C区5層 | 口径10.0 底径8.2 器高1.1 | 回転横ナデ 指ナデ（不定方向） | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒少ない・1㎜大の長石・角閃石多い | 良 | 淡黄橙色 |
| 67 | 土師器 小皿 | C区5層 | 口径8.4 底径6.5 器高1.2 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 | 砂粒・長石・角閃石とも比少ない | 良 | 淡黄橙色 |
| 68 | 土師器 小皿 | C区5層 | 口径10.0 底径6.7 器高1.7 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒・1㎜大の長石少ない・角閃石多い | 良 | 淡黄橙色 |
| 69 | 土師器 小皿 | C区5層 | 口径8.8 底径6.2 器高1.6 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 回転糸切り | 砂粒少ない・1㎜大の長石・角閃石 | 良 | 淡褐色 |
| 70 | 土師器 坏 | C区5層 | 口径13.4 底径8.2 器高3.1 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 回転ヘラ切り | 砂粒・1㎜大の長石・角閃石少ない | 良 | 淡黄橙色 |
| 71 | 土師器 坏 | C区5層 | 口径15.2 底径10.4 器高2.6 | 回転横ナデ 板状圧痕 | ロクロ成形 | 砂粒多い・長石・角閃石少ない・金雲母少ない | 良 | 淡黄橙色 |
| 72 | 土師器 椀 | C区5層 | 底径6.8 | 回転横ナデ 指ナデ | ロクロ成形 高台貼付け | 黒色砂粒多い・白色砂粒少量含む | 良 | 淡黄橙色 |
| 73 | 土師器 椀 | C区5層 | 底径6.2 | 回転横ナデ | ロクロ成形 高台貼付け | 黒色砂粒多い・1㎜大の長石 | 良 | 淡黄橙色 |
| 74 | 土師器 椀 | C区5層 | 底径7.2 | 回転横ナデ | ロクロ成形 高台貼付け | 黒色砂粒多い・長石少ない | 良 | 淡黄橙色 |
| 75 | 土師器 椀 | C区5層 | 底径7.3 | 回転横ナデ | ロクロ成形 高台貼付け | 黒色砂粒多い・白色砂粒少量含む | 良 | 橙色 |
| 76 | 土師器 椀 | C区5層 | 底径7.5 | 回転横ナデ | ロクロ成形 高台貼付け | 黒色砂粒少ない・長石少ない | 良 | 橙色 |
| 77 | 土師器 椀 | C区5層 | 底径8.3 | 回転横ナデ | ロクロ成形 高台貼付け | 黒色砂粒多い | 良 | 淡黄橙色 |

## 付論　宇佐市浮殿遺跡プラント・オパール分析

大分短期大学
佐々木章

### はじめに

イネをはじめアワ・ヒエ・キビなど主要な雑穀類を含むイネ科植物の葉身中に存在する機動細胞は、その細胞壁に珪酸が沈積しやすく植物の種類ごとに特徴的な形状をしている。また、厚い珪化細胞壁は、植物が枯死した後も分解をうけにくいため、機動細胞の形状を保ったまま、永く土壌中にとどまっている。そのため、土壌中に残った珪化機動細胞の化石(プラント・オパール)を顕微鏡下で検出することで、給源植物を推定することができる。さらにプラント・オパールの量を給源植物体重に換算することにより、過去のイネ科植生やイネ科作物の生産量を推定することもできる。このような方法をプラント・オパール定量分析法と呼び、1970年代後半から発掘があいついだ各地の生産跡遺跡の土壌の分析をおこなってきた。さらに進んで、1980年から本格的な発掘調査に先だってプラント・オパール分析を行うことにより埋没水田土層を発掘以前に予測する実験(水田探査法)が開始され、夫敷遺跡(島根県)、若江北遺跡(大阪府)、垂柳遺跡(青森県)などで成功をおさめた。その後も多くの研究が積み重ねられているがプラント・オパール水田探査結果と本発掘で確認された水田遺構の検出結果は一致する場合が多く、プラント・オパール水田探査は事前調査法として高い評価を得ている。

今回、浮殿遺跡土壌分析のプラント・オパール分析をおこなったので報告する。

### 分析方法

遺跡は、県道中津高田線の南拡張部分で中世の遺物を包含しており、宇佐八幡宮の放生会が挙行される和間神社の参道付近に相当すると考えられている。ごく最近の埋土の下に茶褐色を呈する第2層、中世包含層で放生会でカワニナが検出された第3層。中世の表土と考えられている第5層。その下の砂土(西側では固く締まっている)に分層できる。固く締まった西側は参道の下層であった可能性もある。第3層では、さらに東側断面にピット状遺構とおぼしき物が確認できる。これらの各層からプラント・オパール分析試料を採集した。

プラント・オパールの大きさは50μm程度で、肉眼では観察できない。そのため後代の攪乱や採取時の汚染(コンタミネーション)に対して細心の注意が必要である。そのため、採土管を用いて注意深く採取した。採取した試料は採土管につめたまま研究室に持ち帰り図1に示す手順に従って定量分析を行った。

### 分析結果および考察

プラント・オパール分析結果を植物体重に換算して図2～4に示す。単位は広さ10a(1,000㎡)深さ1㎝の土壌中に埋没した植物の地上部乾物重(t)で示してある。イネについては、生産されたであろう籾量も推定してあわせ示した(細線部)。植物体重に換算するには表1の植物体中の珪化機動細胞密度を使った。

表1　植物体中の珪化機動細胞密度

| プラント・オパール分析分類名 | | 代表植物 | 植物体中密度 ($10^4$個／g) |
|---|---|---|---|
| イネ | イネ | Oryza sativa | 3.40 |
| ヨシ属 | ヨシ | Phragmites communis | 1.44 |
| タケ亜科 | ゴキダケ | Pleioblastus Chino var virides f pumilis | 20.83 |
| ウシクサ族 | ススキ | Miscanthus sinensis | 2.79 |

現在まで発掘によって畦畔などの遺構が検出された水田遺構の作土層の分析結果では経験的にイネ籾に換算して、1(t/10a/㎝)を越えることが多い。埋土を含め、分析試料は、いずれもこの値には及ばない。少なくとも安定な水田が広がっていたとはいえない。

タケ・ササ類は、イネ科タケ亜科に属する。独立させてタケ科とする研究者もあるが、古くからの分類方法に従って タケ亜科とした。やや高冷地の落葉樹林や人工の加わった疎林の林床に生じるほか、河川の氾濫原や荒地を広く被って「竹藪」や「笹原」を構成する。タケ亜科の機動細胞プラント・オパールの形状を細分する研究もあるが、まだ実用的でないのでタケ亜科にまとめた。タケ亜科は全体として非常に少ない。検出したタケ亜科の中にはササ類の特徴を示すものが含まれる。

ヨシ属は、一般のヨシと、早い流水中に自生するツルヨシに分類される。プラント・オパール分析でもほぼ分類できるが、まとめてヨシ属とした。ヨシ属も川岸に近いにもかかわらず非常に少ない。

ススキ・チガヤなど路肩や堤防、草原などに普通のイネ科植物を含むウシクサ族は機動細胞の形状が変異性に富み細分が困難であるのでウシクサ族にまとめた。これらも少ないのは興味深い。

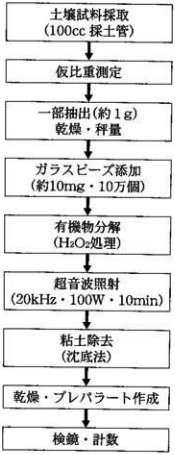
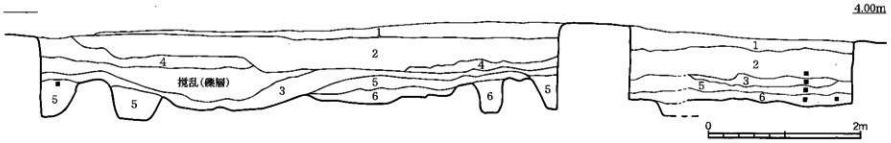
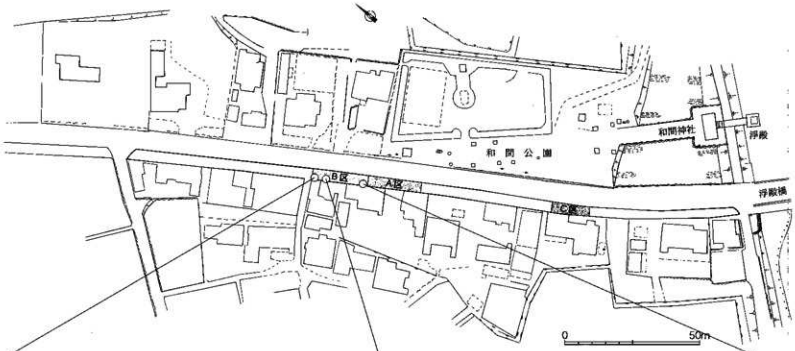



図1　プラント・オパール分析手順

いずれもプラント・オパールも洪水の際に堆積した土にはじめから含まれていたものであろう。ススキなどのウシクサ族を含めてプラント・オパール自体が少ないのが特徴である。これは、遺跡が参道とその近傍に相当しているのであれば、イネ科の草が生えないようにかなり丁寧な維持管理が行われていた結果かもしれない。しかし、中世の表土の可能性のある5層は暗色を呈しており分析はおこなってないが有機物を多く含むと思われる。あるいはイネ科植物が生育できないような林地であって、有機物は樹木に由来している可能性も考えられる。この場合でも林床には笹類が生じないよう管理されていたと思われる。




B区土層断面図




第1層　表土
第2層　明茶褐色土層
第3層　茶褐色砂層
第4層　黒色砂層
第5層　暗褐色砂層
第6層　灰褐色砂層

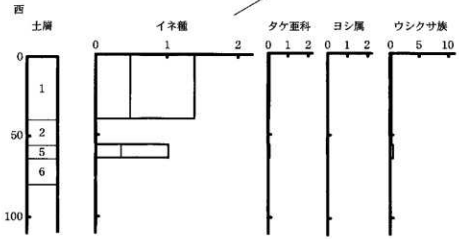



図3　プラント・オパール密度から推定した埋没植物量（t/10a/cm）

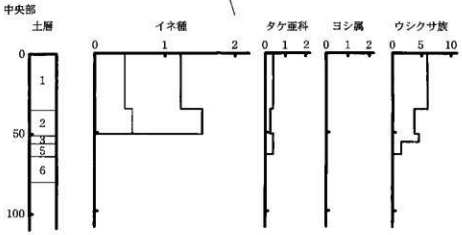



図2　プラント・オパール密度から推定した埋没植物量（t/10a/cm）

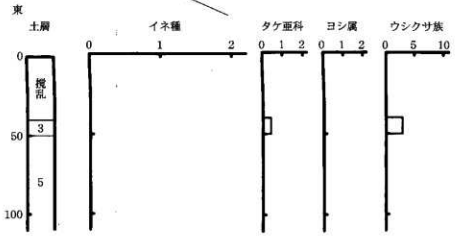



図4　プラント・オパール密度から推定した埋没植物量（t/10a/cm）

浮殿遺跡におけるプラント・オパール採取ポイント及びプラント・オパール密度より推定した植物一覧

図版 1

A区全景(東より)

A区近景(北より)

A区1号土坑

A区2号土坑

B区近景(西より)

B区4号土坑

図版２

B区５号土坑

B区７号土坑

C区14号土坑

C区15号土坑・16号土坑

B区作業風景

C区作業風景

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| フリガナ | ウキデンイセキ |
| 書名 | 浮殿遺跡 |
| 副書名 | 県道中津高田線交通安全第１種事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 |
| 巻次 | ―――― |
| シリーズ名 | 大分県文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第127輯 |
| 編著者 | 栗原　眞 |
| 編集機関 | 大分県教育委員会 |
| 所在地 | 〒870-8503　大分市府内町3-10-1<br>〒870-1113　大分市中判田1977　大分県文化課文化財資料室 |
| 発行年月日 | 2001年３月30日 |

| フリガナ<br>所収遺跡名 | フリガナ<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ウキデンイセキ<br>浮殿遺跡 | オオイタケンウサシ<br>大分県宇佐市<br>オオアザマツザキアザウキデン<br>大字松崎字浮殿 | 44211 | 新発見 | 33°33'16" | 131°24'40" | (1次)<br>980816～980825<br>(2次)<br>980924～981002<br>(3次)<br>990609～990625 | 約65㎡<br>約45㎡<br>約32㎡ | 県道中津高田線交通安全第1種事業 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 浮殿遺跡 | | 中世<br>近世 | 土坑<br>土坑 | 土師器<br>青磁・白磁<br>土師器・陶器 | |

大分県文化財調査報告書第127輯

－県道中津高田線交通安全第１種に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

浮　殿　遺　跡

2001年３月30日

編　　集　大分県教育庁文化課（文化財資料室）
〒870-1113　大分市大字中判田字ビワノ門1977番地
TEL(097)597-5675

発　　行　大分県教育委員会
〒870-0021　大分市府内町３丁目10番１号
TEL(097)536-1111

印　　刷　日の丸印刷株式会社